


| | | | |
|--------------|------------------------|----|---|
| フリガナ | | 所属 | 大学院人間文化創成科学研究科 博士前期課程 理学専攻 |
| 氏名 | C I | | 化学・生物化学 コース 2年 |
| 派遣先名 (国名) | バーギシェ・ブッパタール大学（ドイツ） | | |
| 派遣期間 | (日本出発日) | | (日本到着日) |
| | 2025年9月22日 ~ 2026年2月1日 | | |
| 指導教員 氏名 | 黒木 菜保子 | |  |

1. 留学前、留学後で変化したこと

留学前の時点で、研究テーマに関する基礎知識や理論化学の内容については、日本の大学での講義や研究活動を通して一定程度身に付けていた。しかし、英語で講義を受けて内容を正確に理解することや、研究に関するディスカッションの場面で、自分の意見を英語で即座に表現することには大きな不安を感じていた。また、海外に行くことも初めてであった。そのため、今回の留学では、① 専門分野の内容を英語で理解する力を養うこと、② 英語で発言することへの心理的な障壁を下げること、③ 異文化をより深く知ること、を目標とした。

留学中は理論化学に関する二つの授業を受講したが、特に印象的であったのは現地学生の授業への参加意識の高さである。学生たちは積極的に質問を行い、講義の途中でも活発に意見交換を行っており、その姿勢に強い刺激を受けた。私自身もその雰囲気から触発され、徐々に授業中に発言する機会を増やすことができた。最終的に、受講した授業はいずれも最高評価である「Very good」の成績を収めることができた。また、現地の理論化学研究室の先生のご厚意により、研究室のデスクを使用させていただき、ラボメンバーと同じ環境で研究活動を行う機会を得た。ゼミに参加し、現地学生と英語で議論を重ねる中で、自分の考えを整理しながら伝えるスピーキング能力を実践的に鍛えることができた。また、昼食の時間にはラボメンバーと学食で食事を共にする機会が多く、日常的な会話を通して交流を深めることができた。会話の中では、博士課程の学生をはじめとする多くの学生と将来のキャリアについて話す機会もあり、ドイツでは日本と比較して博士課程へ進学する学生が多く、修了後には研究職に限らない多様なキャリアの選択肢が存在することを知った。こうした交流を通じて、自身のキャリアに関する視野を広げることができた。

学業面に加え、多くの地域を訪れる機会にも恵まれ、異文化への理解を深めることができた。特にポーランドのアウシュビッツ収容所を訪れた際には、戦争の歴史や人権について深く学んだ。現在の国際情勢を踏まえて歴史を振り返ることで、人権の尊重がいかに重要であるかを改めて実感した。こうした経験を通して、専門知識の幅を広げるとともに、自身の研究が社会にどのように貢献し得るのかをより一層意識するようになった。

2. 将来のビジョン

ブッパタール大学への留学では、多様なバックグラウンドを持つ学生と交流することで、相手の意見を英語で理解しながら、自信を持って対話する英会話力を培うことができた。この経験を踏まえ、帰国後はこれまでの研究成果を基に国際論文の執筆を進め、査読付き論文として投稿することを目標としている。また、入社後のキャリアを考える上で海外での活動も視野に入れたいと考えようになった。修士課程修了後は、出光興産株式会社次世代研究所にて、研究職として入社予定である。同研究所は、脱炭素社会の実現を見据え、まだ世に出ていない新技術や次世代素材の創成を担う部署であり、エネルギー・インフラを支える基盤技術の研究開発を通じて社会課題の解決に直結する役割を担っている。今回の留学で得た経験を基盤とし、海外研修や共同研究の機会を積極的に活用しながら、国際的な研究連携の中で持続可能な社会の実現に貢献できる研究者として成長していきたいと考えている。留学を通じて得た知識や経験を活かし、次世代の人々が安心して暮らせる社会の実現に寄与していきたい。